

美意識を育む図画工作科・美術科の授業開発

— タキソノミーテーブルの開発実践を通して —

中島 敦夫 吉川 一生 大和 浩子 内田 雅三
中村 和世

1. はじめに

新学習指導要領¹⁾では、「形・色・イメージ等」をキーワードにした共通事項が新たに示され、図画工作・美術科の中でつきたい資質や能力がより明確化された。今日、義務教育9年間の中で、図画工作・美術科という教科の中で、また、個々の題材を通して、子どもたちにどのような力を付けていくのが改めて問われている。つきたい力を明確化して授業の目標・課題を設定していくことは、授業改善及び教科の目標を達成していくことにもつながっていく。このことは、図画工作・美術科の学校教育における重要性を再認識していく意味でも欠かせないことである。

これまで私たちは、3日美術教育²⁾で提唱されている生きる力に向かう美術教育を実現することを目標にして、「美意識」を育む取り組みを模索してきた。美意識を育むことは、子どもたちが自分なりの感性を働かせて学習を進めていくために有効に働くと考えている。昨年度は、「美意識を育む図画工作科・美術科の授業開発～創造的思考力の育成と関わって～」³⁾と題して、ポートフォリオ評価法の開発・実施やタキソノミーテーブルを基にした評価の指標の作成を行うことができた。そして、表1のようにつきたい力を整理するに至っている。今年度はタキソノミーテーブルの具体的な活用を通して子どもたちにつけていきたい力を明確にしながら、創造的に生きるために必要な美意識を育むための授業開発を行いたい。

2. 研究の概要

(1) 目指す子ども像

美的体験を重ねる中で、自分が美しいと感じる価値を認識し大切にできる態度を身につけ、さらに他者の価値観を理解しようとし、自他ともに美意識を高めようとする子ども。

(2) 本研究における美意識の定義

美しさやよさに関する価値の意識や感情

「美意識」は、「美に関する意識。美に対する感覚・知識」⁴⁾と辞書的には説明されている。また、『美学辞典』によると心理学的立場では美的態度における意識過程をさし、哲学的観点では美的価値に関する直接的体験⁵⁾を意味する。

さらに美意識は活動様式から見て美的享受あるいは美的観照と芸術創作の2面とかがかかわっている。この両者の間には緊密な関係があり、本質部分では統一的であることが認識されている。⁶⁾ 私たちも美意識は、授業における創作活動及び鑑賞の活動両方で働くものであると考えている。子どもたちは、美的享受・美的観照を含む鑑賞活動において自分なりの視点を持って作品をみたり、創作活動の中で自分なりのこだわりをもって作ったりしている。これらを踏まえて、私たちは美意識を、鑑賞活動・創作活動を含めた造形的な活動の中で働く「美しさやよさに関する価値の意識や感情」と定義している。

しかしながら、何をもって「美」と感じるかは個によって違う主観的なものである。同じ現象であっても受け止める側によってそれが美であることも、そうでないこともある。つまり、美意識とは個々によって異なる「美的な価値観」と言い換えることができるであろう。この極めて個人的な価値観に、美術教育を通してよりよい生き方を追究するという視点を加えるならば、個人的・主観的な価値観と同時に、自分を取り巻く他者や文化とかがかかわっていかうとすることに価値を見出す意識を育てていく必要がある。なぜなら、文化を継承し発展させていく大きなうねりを生み出すためには、個人が他者の美意識とともに社会との関係の中で伝統を理解することが必要であり、それを通して文

Atsuo Nakashima, Kazuo Kikkawa, Hiroko Yamato, Masazou Uchida, Kazuyo Nakamura: Developing art and handicraft lessons to cultivate elementary and junior high school children's aesthetic feelings — Application of the new bloom's taxonomy to art education —

化の基盤となる個人の美意識の成長・成熟が可能となると考えるからである。

(3) 美意識が育まれる過程

美意識を構成する心的要素として感覚・表象・連合・想像・思考・意思・感情などが挙げられ、これらの要素の複合体に過ぎないとされている。⁷⁾ これらの要素は、「感性」「知性」「技能」につながるものである。

本研究では、「感性」と「知性」そして「技能」が相関的にかかわることによって「美意識」が育まれるという仮説を立てている。(図1参照)

(4) 美意識を育むための学習指導の方法

①タキノミーテーブルの開発・実践

タキノミー⁸⁾とは、ブルームの提唱した評価の考え方で、現行学習指導要領の観点別評価4観点はこのタキノミーを応用して設定されている。タキノミーでは、教育目標が以下の3つの領域に整理されている。

- 認知領域：知識の記憶や活用からなる
- 精神運動領域：運動技能や操作技能からなる
- 情意領域：興味、態度、価値観からなる

これらの3領域を簡潔に要約すれば、認知は知識・理解、情意は感情・情緒、精神運動は技能・技術に関する領域と見なすことができる。

近年、クラスウォールらによって、ブルームが前世紀後半に提唱したタキノミーを継承・発展させた「新タキノミー」が提唱されている。本研究ではこの新タキノミーを美術教育の評価に応用するべく、

認知領域・情意領域・精神運動領域の3領域に、自己知識や自己調整力の側面として「メタ認知」を加えた目標群の試案を作成した。(表1参照)今年度は、学年・題材レベルでのタキノミーテーブルを基にしてつけたい力を明確にした指導を行なっていく。

②「感性」・「知性」・「技能」が相関的に関わるための具体的な指導方法

・多様なイメージを持って活動するために
バズセッションやブレインストーミング、イメージマップなど思考法を用いながら学習を行っていくようにする。他者と関わりあいながら意見を出し合う中でイメージを拡げ、自分の表したいイメージを持つようにしていく。

・見通しを持って活動をするために
試しの活動やアイデアスケッチを描く活動などを取り入れる。初めて出会った材料や道具に対して自分がかかわっていくか見通しを持つことは欠かせないことである。体験を通して材料や道具にかかわっていく中で子どもたちは創造を拡げていく。そして、それを表現することで自分なりに見通しを持って活動できるようにする。

3. 研究の目的

小中一貫9年間での図画工作科・美術科におけるタキノミーテーブルの開発を通して指導方法を系統立て、子どもたちに生涯を通じて創造的に生きるために必要な美意識を育むための授業開発を行う。

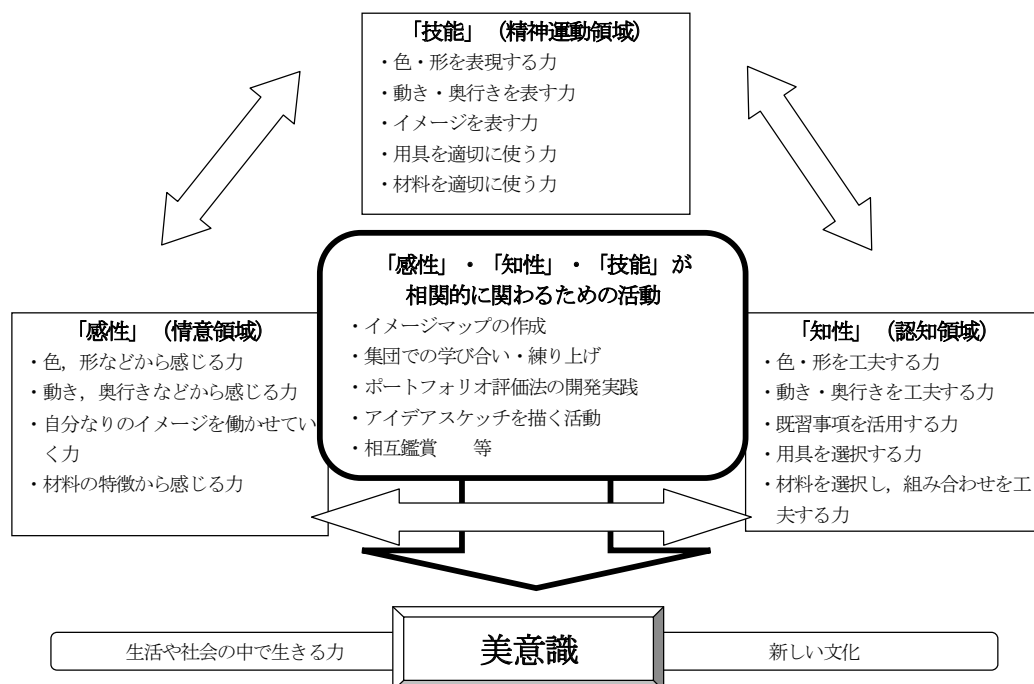


図1 美意識が育まれる過程

表1 図画工作・美術科のタキノミーテーブル

	知識の次元	認知プロセス次元		
		1 思い出す/理解する	2 応用する/分析する	3 評価する/創造する/内面化する
認知	事実的知識 (美術用語, 造形の要素と原理)	これまでの記憶から, 美術用語や造形の要素と原理を想起して, 新しい学習内容に関連づけている。	制作や批評・鑑賞の活動において, 状況に適した美術用語を用いたり, 造形の要素と原理を活用したりしている。	制作や批評・鑑賞の活動を通して, 美術用語や造形の要素と原理に関する新しい認識を獲得している。
	概念的知識 (題材のテーマのコンセプト)	題材のテーマのコンセプトを認識・理解している。	制作や批評・鑑賞の活動において, 題材のテーマのコンセプトを同定し関連性を判断している。	題材のテーマのコンセプトをベースにしながら, 制作や批評・鑑賞の活動において, 自分自身のコンセプトを深めている。
精神運動	手続的知識 (表現の技術と技法, 批評・鑑賞の方法)	技法・技術を理解し習得する。 批評・鑑賞の方法を理解し習得する。		習得した技法・技術を自らの制作に応用している。
情意	感情の次元	情意プロセス次元		習得した批評・鑑賞の方法を自らの批評・鑑賞に応用している。
	興味・関心・態度	1 受容する/反応する	2 価値づけする/組織化する	
		美的な現象や存在を受け入れようとしていたり, それらに対して注意を向けたりしている。	美的な現象や存在に見出される価値を認め, その価値を自分の持っている価値の意識や感情との関連で吟味している。	
美的な価値観(美しさやよさに関する価値の意識や感情)	美的な現象や存在との出会いから, 自分の持っている価値の意識や感情を喚起している。		制作や批評・鑑賞の活動を通して, よさや美しさに対する価値の意識や感情を再構成している。	
メタ認知	メタ認知の次元	1 思い出す/理解する	2 応用する/分析する	自分らしさや改善点の認識に基づいて, 自分なりの美意識を形成したり深めたりしながら, 制作や批評・鑑賞の活動に取り組んでいる。
	自己知識	ポートフォリオ等からこれまでの学習を思い出している。	制作や批評・鑑賞において自分らしさが表れている点を分析している。	
	自己調整		制作や批評・鑑賞において改善すべき点を見出している。	

4. 研究の方法

美意識を育むために適切な授業開発ができていたかという視点から以下の方法で検証を行う。

① アンケートの実施

認知・精神運動・情意・メタ認知の4つ領域に合わせた設問を作り, アンケートを取る。昨年度の結果と比較をして研究の成果と課題を探る。

② 研究授業の実施及びタキノミーテーブルの妥当性の検討

タキノミーテーブルを作り, 研究授業などを行なって実践する。事後に振り返りをし, タキノミーテーブルのよりよい活用法について検討を行う。そこから次年度以降の実践につながるようにする。

③ 子どもの作品分析

ポートフォリオや作品分析をもとにして子どもたちの学習の様子を振り返り, 分析を行う。そこから題材開発や授業作りの中でどのような手立てが有効であるか, また今後, どのような改善ができるのかを探っていく。

5. 研究の実際(実践事例)

(1) 題材について

○題材名 「○○な焼き物ダルマを作ろう」

○学年 小学校2年生 38名

○実施時期 平成23年10月～平成23年11月

○題材の概要

本題材は三原市の民芸品である三原達磨を陶芸用粘土を使って作る活動である。「○○な焼き物ダルマを作ろう」の○○の中には「かっこいい」「かわいい」「お

もしろい」などの自分なりの目標を設定し活動に取り組む。陶芸用の粘土は火を通すことで初めに成形したときとは変わっていくという不思議さを感じることができるものである。学園内や自分が住んでいるところなどの土を混ぜて自分だけの粘土を作り, それを使って成形していくことで, 活動により主体的にとりくめるようにする。作品完成までに, これまでに学習した技能を生かしたり, 新しく学習した技能を組み合わせたりしながら表現に生かしていく。

本学級の子どもたちは, 指示を落ち着いて聞き言われたことを確実にこなすことはできる。しかし, 自ら積極的に題材にかかわったり, 発想したりすることは苦手である。アンケート(平成23年4月実施)でも初めての題材に抵抗を感じている子どもが50%以上いた。これまでの活動では5月に「土って気持ちがいいね」という題材で, 土の感触を楽しんでいる。また, 6月には「紙粘土をつくろう」で身近にあるものから材料を作り作品を作る経験をしている。これまでの活動で, 土に親しんだり, 粘土を自分で作ったりすることには慣れてきている。陶芸用粘土を使うのはこれが初めてである。

○題材の目標

- ・粘土の感触を楽しみながら, 意欲を持って活動に取り組むようにする。
- ・自分の目標に合った達磨を工夫するようにする。
- ・成形の基礎的な技能を身につけ, 自分のイメージに合った技法や材料を選んで表現に生かすようにする。
- ・作品の色・形・模様バランスなどを考え, 身の回りにある焼き物に対する見方を広げるようにする。

○学習計画（全5時間）

第1次 神明市の様子を調べ、創造を膨らませよう（2時間）

- ・神明市の映像からダルマに興味を持ち三原達磨について調べよう。
- ・調べたことからイメージマップを作ろう。

第2次 自分だけの焼き物達磨を作ろう（2時間）

第3次 附属三原ダルマ市を開こう（1時間）

○本題材のタキノノミーテーブル

表2 「○○な焼き物ダルマを作ろう」のタキノノミーテーブル

	知識の次元	認知プロセス次元
認知	事実的知識 (美術用語、造形の要素と原理)	<ul style="list-style-type: none"> ・どべの意味を知っている。 ・空洞を作る方法を理解する。 ・釉薬の役割が分かる。 ・色付けの意味が分かる。
	概念的知識 (題材のテーマのコンセプト)	<ul style="list-style-type: none"> ・○○に当てはまる部分を設定する。
精神運動	手続的知識 (表現の技術と技法、批評・鑑賞の方法)	技法・技術を理解し習得する。 批評・鑑賞の方法を理解し習得する。 <ul style="list-style-type: none"> ・どべをつかって接着する。 ・達磨の形を成形する。 ・心材を使って空洞を作る。 ・「○○さ」を表現する。 ・釉薬を塗る。 ・色付けをする。
	感情の次元	情意プロセス次元
情意	興味・関心・態度	<ul style="list-style-type: none"> ・生活経験を振り返って題材とむすびつける。 ・作りたいもののイメージを持つ。
	美的な価値観(美しさやよさに関する価値の意識や感情)	<ul style="list-style-type: none"> ・○○らしいダルマにするために△△する。 ・活用する技能(空洞を作る焼成・粕薬)に興味を持つ。 ・活用する技能(空洞・磨成・釉薬など)に価値を見出す。
メタ認知	メタ認知の次元	1 思い出す/理解する
	自己知識	<ul style="list-style-type: none"> ・○○さについて自分なりに振り返る。 ・発想・成形・色付けなどについて振り返る。
	自己調整	

(2) 学習の実際

活動までに題材に関連した活動を意図的に行う

粘土を扱う活動の前に、泥遊びをする活動を「土は友だち」と題して行った。校舎裏の広い畑を使って行うことで開放感の中で活動に取り組みやすくなった。また、裸足になって土の感触を体全体でとらえられるようにした。最初は抵抗がある子どもも見られた。しかし、周囲で川を作ったり、水を含ませて泥にしてお城や山などを作ったりする子どもが増えるにつれて、誘われるように活動に入り込んでいくことができていた。

事後の子どもの感想には「はじめはぶにゆぶにゆで気持ち悪かったけど、慣れてきたら気持ちよくなってきた。」「水を混ぜたら粘土みたいに固めることができたので、いろんなものを作ってみたよ。」などの感想

が見られ活動を楽しんだ様子が伺われた。アンケートでは、全員が「とっても楽しかった」あるいは「楽しかった」と答えており粘土造形への意欲付けにつながった。



図2 泥遊びをしている様子

題材について調べる活動を行う

これまでは題材に対する子どもの持っている限られたイメージから活動を始めることが多かったため生活経験の差が大きく活動に対する意欲や関心にもばらつきが見られた。そこで、題材のもととなる三原達磨について調べる時間をとった。調べていく中で三原達磨には以下の3つの特徴があることを見つけた。

○鉢巻をしていること

○はじめから目が入っていること

○中に小石が入っておりそれが鳴ることで願いが成るとい意味がこめられていること

これに関連して、三原の特産である、たこの形をしたものや変わった面白い達磨があることを見つける子どももいた。

目標を自分で設定して活動に取り組む

「○○な動物」や「○○なダルマ」というように○○にあたる部分を自分で設定することによって造形要素に着目した活動を意図的に行うことができると考えた。「はじめに」でも述べたように生涯にわたって主体的に美的活動にかかわっていくためには、させられるのではなく、目的や意図を持って題材に取り組む態度が大切だと考える。自分で目標を設定すれば、それを達成するための工夫も何となくや思いつきの工夫ではなく、○○らしく見せるための意図のある工夫となる。それが実際の造形活動でも意識され、さらには、できあがってからの鑑賞活動においてもその視点が継続されるのである。自分で目標設定することによって、最後まで意欲を維持していくことができると考える。本題材では、○○の中に、「強そうなだるま」と入れたり、「いらっしゃいだるま」と入れたりしていた。「強そうな」と入れた子どもは「強そう」に見えるための工夫をワークシートに書き込み、「いらっしゃい」と入れた子どもは歓迎しているように見えるための工夫を具体的に書き込んでいくことができていた。するこ

とが明確になることによってモチベーションを維持していくことができていた。



図3 児童作品

(3) 成果と課題

「○○なダルマ」を作ろうという課題設定で制作に取り組んでいくことでより自発的に題材に取り組む姿が見られた。○○らしく見えるためにどのような工夫をしたらよいのかを考えることで、受身ではなく自ら設計して活動するという体験をすることができたと考ええる。また、この題材までに関連した題材を計画的に行ったり、調べたりする活動を通して、題材に対する深い理解と興味関心を喚起することもできたのではないだろうか。

タキノノミーテーブル（表2）は、低学年の発達段階を考えて認知プロセス次元の「1 思い出す／理解する」段階のみを想定して行った。タキノノミーテーブルがあることで実際の子どもの活動場面を看取っていく際に視点が明確になっており、客観的に評価していくことができた。ただ、今回はすべての領域で見取っ

ていく形になりとても煩雑であった。題材によって重点になる領域が異なるので、年間の計画を立てる際にタキノノミーテーブルの配列も同時に考え、1年間トータルですべての領域の評価を行い次のステップにつなげていくような評価のシステムにしていかなければならない。

6. 成果と課題

(1) アンケートから

今年度は諸事情により、実践が小学校のみとなった。そのため、アンケート結果も昨年度の小学生の数値と比較している。情意と精神運動の一部では数値は上昇したものの他の領域（特に認知とメタ認知）で、数値が下がっている。

認知面では、制作時や鑑賞時のイメージができないという回答がみられる。実践の中で、イメージマップやためしの時間の確保などでイメージを耕す時間をとって、十分なイメージを持つことができるようにしてきたが、授業中の様子では気づかなかった点である。この背景には子どもたちの表現に対する要求が高まってきたことが考えられる。また、題材に応じて柔軟に題材の提示の仕方や授業展開の工夫を考えていきたい。

また、メタ認知にかかわる自己評価は、昨年度よりも下回った。メタ認知の項目自体も他の項目よりも低い数値になっている。これは昨年度から続く課題であり、今年度は、昨年度から積み上げてポートフォリオ評価法を行ってきたが、アンケートでは思ったよう

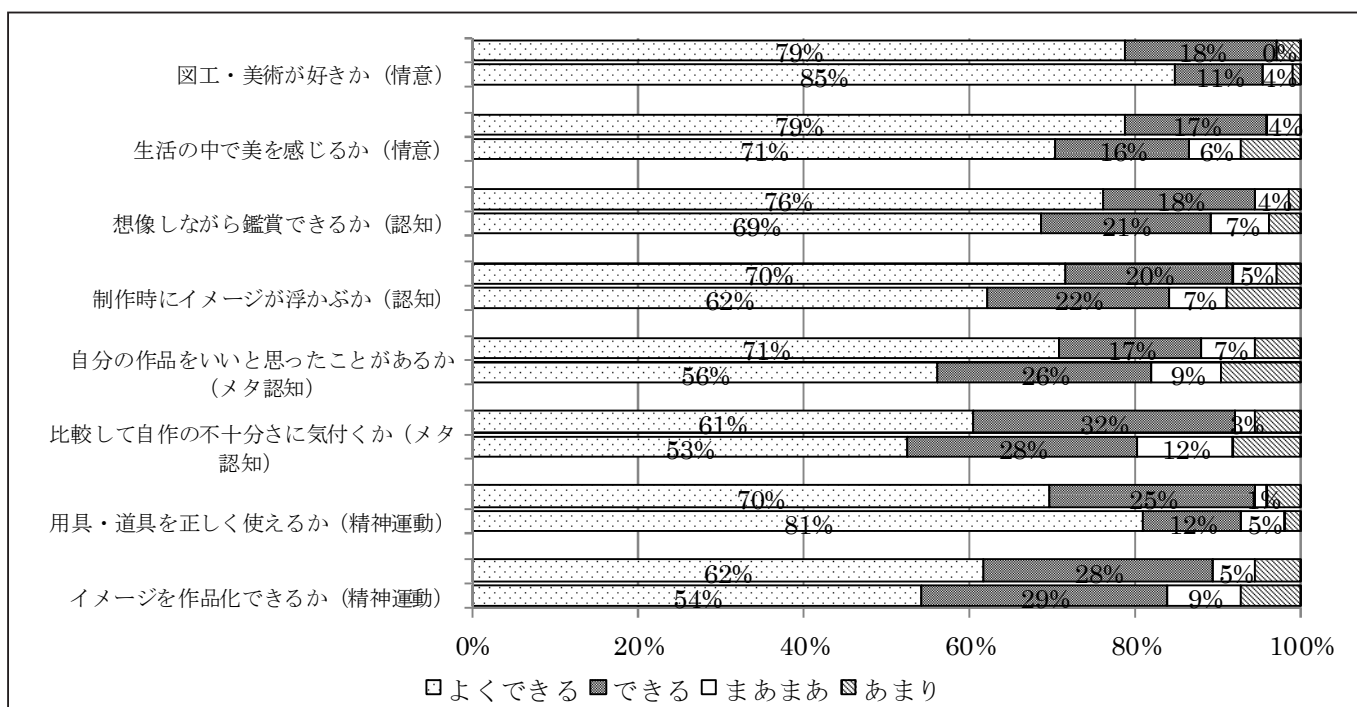


表3 アンケート結果（上が平成22年度，下が平成23年度）

な成果を上げることができなかった。反省点としては、ファイリングの時間が思ったよりもかかってしまい、授業の中では時間が足りずに確保できなかった反省がある。今後は、一枚ポートフォリオの作成などを考えていきたい。

また、ポートフォリオを活用した学習展開の工夫も欠けていた。ポートフォリオ評価法のさらなる改善・工夫はもとより、ポートフォリオ評価法以外での工夫の必要性も感じた。

(2) タキソノミーテーブル

タキソノミーテーブルは、表2にあるように発達段階や題材に合わせて、より具体的なものを作成した。尚、表2のものは事後に実践を受けて、より視点を明確にして具体化したものである。来年度は、学年全体の中での位置付けを考え、年間を通して育んでいくという視点を加えていきたい。また、それぞれの項目が授業の中のどの時間に相当するのか、より具体的にすることでより焦点化した指導を行なっていきたい。

7. おわりに

アンケートでは、課題が多く出てきたが、子どもたちの授業中の姿やワークシート等への記述、完成した作品をみると、「美意識」の高まりは確実に感じられる。また、タキソノミーテーブルも題材に合わせて施行をしていくたびによりよいものへとなりつつある。しかし、メタ認知の領域では、さらなる改善が求められている。来年度は、授業の視点をしっかりと持ち、メタ認知の領域を中心課題として、研究を進めていきたい。

引用（参考）文献

- 1) 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 図画工作科編』 日本文教出版株式会社；文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説 図画工作科編』 日本文教出版株式会社。
- 2) 若元澄男 (2000) 『図画工作・美術科重要用語300の基礎知識』 明治図書出版。
- 3) 吉川和生, 中島敦夫, 大和浩子, 内田雅三, 中村和世 (2011) 「美意識を育む図画工作科・美術科の授業開発—創造的思考力の育成とかわって—」『広島大学学部・附属学校共同研究紀要』 第39号, pp.255-260.
- 4) 新村出 (2008) 『広辞苑第六版』 岩波書店。
- 5) 竹内俊雄 (1961) 『美学事典』 弘文堂。
- 6) 同上書。
- 7) 同上書。
- 8) enjamin S.Bloom著 梶田毅一訳 (1974) 『学習評価ハンドブック』 第一法規出版。
- 9) 梶田毅一著 (2002) 『教育評価[第2版補訂版]』 有斐閣双書, pp36-39.
- 10) 福家省造 (2011) 「造形表現活動の発達の過程とつけたたい力 (模式図)」『子どもと美術』 No.68, pp. 20-21.
- 11) 中村和世・大和浩子・中島敦夫・吉川和夫 (2010) 「図画工作・美術科における『ブルームのタキソノミー改訂版』の活用に関する考察」『学校教育実践学研究』 第17巻, pp.71-80.
- 12) Winner, E. & Simmons, S. (Eds) (1992) *Arts PROPEL: Handbook for Visual Arts*. Educational Testing Service and the President and Fellows of Harvard College.